



西國三十三所名所圖會八



一之坂 六田より登る最妙の坂なり。凡興院より百餘町の間に民家あり。丁毎に標石あり。

都藍尼像

上野新詠

禪丘登僊何處去 空傳片石都藍名

荒井公廉撰

留與人間之尺杖 化為芳野萬株櫻

元亨叙書曰都藍尼大和國の人あり精く佛法と修練し兼て仙術と學び吉

野山の麓に居りて世の傳ふ多きを彼金峯山に抑黄金の地より金剛藏王

菩薩を護りて婦人の境内に入ると不容然と都藍言て曰我女身ありて下も

淨戒と持ち靈感の驗ありて凡俗の婦人とは比すべきやと乃ち金峯に攀登れ

忽ち雷電騒ぐ四方俄に晦暝しく迷ひて路を失はば時持所の杖を棄てり

とんば其杖のつらき種々漸く大樹と成りて都藍言て龍と咒し是に乗て山を

昇りてつらき泉源よりつらき水より進むる能はば其の都藍嘆と

あつて宮密の上はつらき其趾もあつて崩れさけも亦其の龍成

養ひ地宮の下にあり實も二つもの遺跡ありて現存せりて世に



言る中、此匠長生の道を得たり、其終るもつらと知りあり

一説、大峯山上行場の道、足研山と云ふ所あり、此所、二尺許の石像あり、合、役行者の母公の像と云ふも、是も、則ち都藍尼の像と云ふ、叙書、所謂登山の折、忽ち雷電霹靂としく進み得たり、此山と崩せり、古址あり、是より山と云ふ、且其像と爰、造て

都藍尼影像

此園の坂に建る所の石像

吉野山奥院

安禪寺本堂に

安する所

長二尺五寸許の

木像

今其影像と云ふ

板行、普く諸人に

授くるもの

地所、遠近の遠いられ、因らんと出



世人誤つて此像と役行者の母公と言傳つたり、云此説とも、一聞也

丈六山一藏王堂

長峰薬師堂

本尊 薬師瑠璃光佛

村上彦四郎義光之塔

同忠照之碑

一の坂より登る山中右の傍、有藏王権現役行者と安ん左、谷間と一口の、さうく、
一の坂より凡十五丁目、是より長峯の薬師堂と凡十町余、
一の藏王堂の次、あり僧舎一字堂の左、隣り堂の、向し、茶所有り、
薬師堂の右の、山上、一、元弘二年正月十六日吉野の
合戦、大將大塔宮、親王、代つ、あ、の、
右塔の下、あり、天明二年、高取内藤氏、建、所、

忠照之碑

碑文上三列ス

元弘之亂、大塔王出據吉野、東師圍之七日、不克、東人宵潛入、金
峰、昧且三覆、齋起、鼓謀而進、王環甲出戰、身被七矢、流血及屨、未
遑、拔矢、還入藏王堂、立、飲于庭、中小寺相摸、斬一人、挂首、劔鋒歌
且舞、村上君、諱、義光、棄、歎、走、回、謂、王曰、彼、熾、我、潛、臣、願、賜、王、鎧、衣、
代、王、而、死、王曰、死、則、同、所、君、厲、言、固、諫、進、解、王、衣、登、樓、呼、曰、神、孫、
帝、子、今、已、自、裁、若、等、蠢、死、亦、不、久、志、以、爲、法、説、甲、投、下、刳、腸、榔、辟、
銜、鋒、而、悅、東、師、大、驚、解、圍、爭、獲、王、逆、君、子、義、隆、見、君、臨、死、與、俱、君、
曰、叱、若、衛、而、長、隆、乃、從、王、鬪、殺、數、人、而、創、走、投、竹、中、屠、腸、而、斃、王、

適高野遂殲渠魁嗚呼方王事多難君之忠烈百世之後夫婦之
愚尚猶誦之景文母及之未嘗不髮上乃樹貞石于此以勒大節
辭曰諫則屈誨則信得仁哉若人由義哉若人

天明三年冬十月

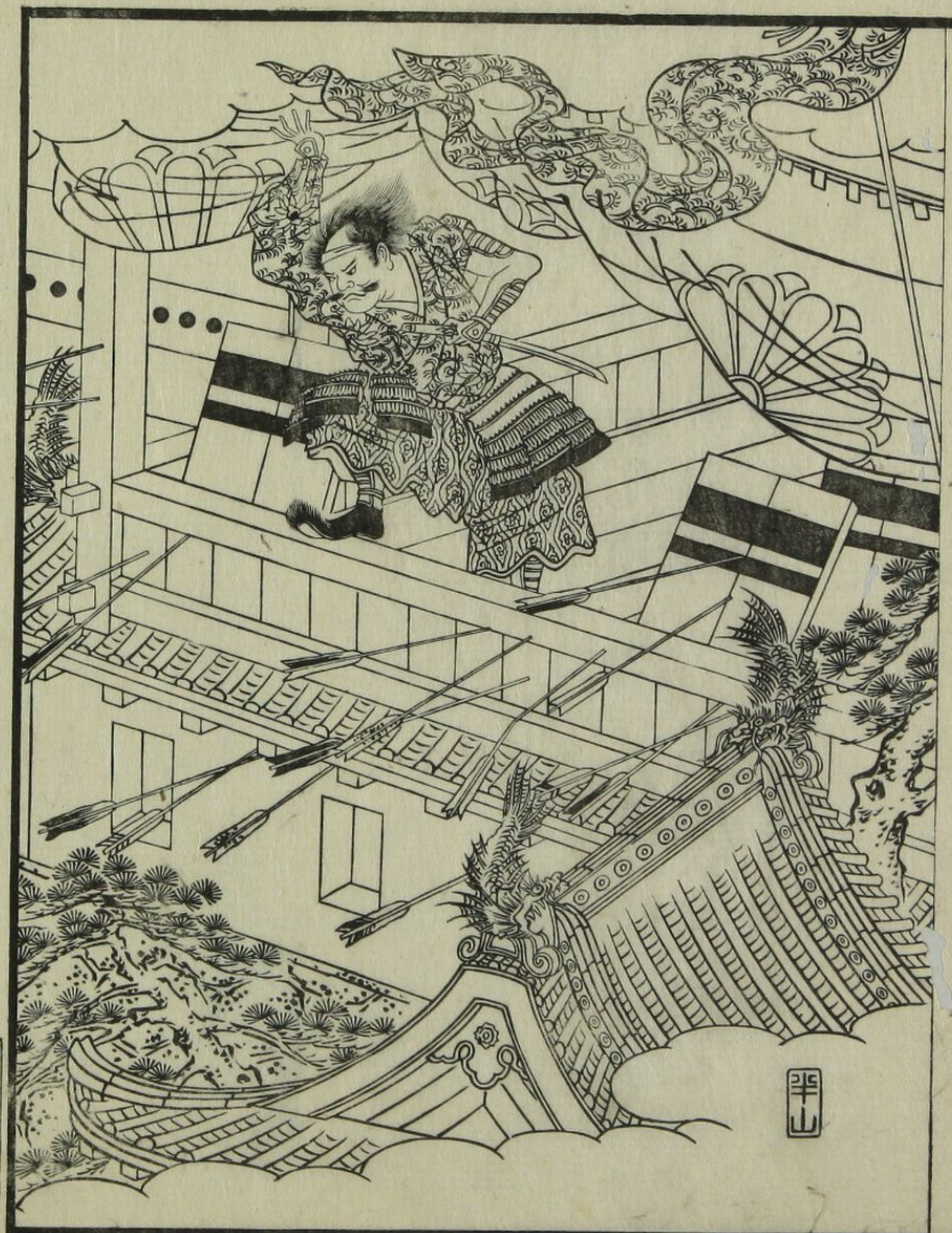
高取 内藤景文武立

太子紀

宮ハ截王堂の大庭ニ並居セシメテ大幕打揚ク最後の御酒宴アリ宮ハ御
鏡ノ立所ノ矢七筋御頬ニ二の御腕二箇所突キセシメテ血の流ル事備
のぐく然ツモもも立テる矢ヤも抜バちぐさ血も拭イウバ敷皮の土ニ立ラゲ
大盃ニ三度傾ケセシメ小寺相摸四尺二寸の太刀の鋒ニ敵の首ト貫ク
宮の御前ニ畏リテ戈鋌劔戟ヲ降ル雷光のぶくあり盤石岩ト飛ビ事
春の雨ニ相同ト然ラハ天帝の身ハ逆ブク修羅カガ為破ラ
唯ト揚テ舞タル有テハ漢楚の鴻門ニ會セ時項伯ト項莊ト劔ト抜
舞ハ禁噲庭ニ立ラケ帷幕トカゲテ項王ト睨ト勢ハも斯ヤ覺ハ
カウテ大手の合戦急也覺ク敵御方の時の聲相文ニ聞カ
實も其戦ハ自ラ相當多ク見テ村上彦四郎義光鏡

とととつらの矢十六筋拈野ハ残る冬草の風ハ階ニ吹ケ折懸ク宮の御
前ニ集テ申テ大手の一の木戸言甲斐ハ責破ラレツ間ニの木戸ハ
支テ數刺相戦イ候ハ所ハ御所中の御酒宴の聲冷ヤト聞エ
候ハ付テ付テ候ハ敵ト取上テ御方の氣の疲レ候ハ
ゆま此城ニ功代立ン今ハ叶ハ覺ハ候ハ未ダ敵の勢ト余所ハ
廻ハ候ハ前ニ一方より打破ク一先落テ御覽何ク存ト候ハ
但ハ跡ハ残ラテ戦ハ兵ハ御所の落セシメ入者ウ心得テ
敵ニ追モ追モ進ム覺ハ候ハ恐モある事ト候ハ
おもれテ候ハ錦の御鏡直垂ト御物具ト下ニ御諱ハ子ト
犯ク敵ト欺ムキ御命ニ代テ候ハ申レバ官争ト有
死ハ所ト所モ免モ痛モ仰ラレテ義光言ト荒ラト
斯る浅猿キ事ハ候ハ漢の高祖采陽ニ圍ナレハ紀信高祖の真似ト
楚ト欺ムハ高祖ハ許ハ候ハ是程小言甲斐

本朝通記
 義光初從皇子前廻歷
 南紀之間以徃百戰不
 危不顧其身遂以命代
 君之大事真千古之英
 雄可謂獨步前後護良
 先以義光比官勲官勲
 猶有勇無義如義光父
 子勇也忠也轟然傳萬
 世漢有紀信我朝有義
 光孰人謂其忠之雄者
 乎云



るに御所存して天下の大事と思食らる事こそとて早々の御
物具と脱せの候て申て御鎧の上帯と解奉まば宮げよりや思召る
御物具鎧直垂を脱替させのひて我若生くば汝が後生と吊るべし其
敵の手にかゝる尊途まゝも同岐の伴ふべし仰られて御涙と流させのひ
わが勝手の明神の御前と南に向て落させのべ義光の二の木戸乃
高槽小上を遙く見送り奉て宮の御後影の幽に隔させのひりて見て今
斯く思ひれば槽の挾間の板と切落しく身とゆゑは巨て大音声成りて名乗
るゝ天照大神の御子孫神武天皇より九十五代の帝後醍醐天皇第二乃
皇子一品兵部卿親王尊仁廷臣の爲に亡がされ恨み成泉下り報せんこゝろ
只今自害する形勢見おとそ汝等が武運つきて腹と切んずる時の手本に
せし言依り鎧脱て槽より下へ投落し錦の鎧直垂の袴をうす練貫の
二小袖と押層脱て白く清げある層に刀成つて立ち左の脇より右のそ腹
すいで一文字の檜切を賜つて槽の板に投けま大刀の口を啣てうづぶら

成てぞ臥しるも依り大手搦手の寄手あれと見くととや大塔宮の御自害
ゆゑ我先に御首成りしんと四方の圍成解く一府に集る其間に宮に
了遠て天比河へと落させのひも依り南より廻りて吉野の執行が勢
五百余騎多幸の妻内者おき道と要をかた廻りて打ち奉らん
取籠る村上彦四郎義光が子息兵衛藏人義隆は父が自害する時
共腹成切んとこの木戸の槽の下まで馳来りたりも又大に練りて
父子の義はる事ならぬ且生る宮の御先途成見とて進ませ
庭訓と残りしをバカりく且の命とのべて宮の御供を候ひける
落めく道の軍事とて急しく討死せば宮落得させたりしや
覚へもれば義隆一人暗く追いか依敵の馬の緒膝薙て
切す平頭切く刃落させ九折ある細道に五百余騎の敵と相受く
半時をうご支て依り義隆節石のおくおつてそのも其身金鐵お
され敵の取巻て射る矢も義隆すべし十余ヶ所の疵と被りて

死ゆるも猶敵の手よりかゝり思ひもん小竹の二村のちる中へ
走り入て腹かき切て死より村上天子敵とあせ死討死し其間宮ハ
虎口死成御適有る高野山とぞ落させのひり候ま
千本櫻 長峰二月見る櫻より俗に一月千本とい此地と千本と言あへせり

吉野紀行

吹まきつらねやつぎを右野山よかふ白く花は矢風

大納言 雅章

富士ハゆきとむつ河乃と〜此やう

鬼貫

日本花 七曲の坂の上り攀り谷の 嵐山 長峯の薬師ぶつ

七曲 是多武峯の行路にて飲貝丹治り登る道より吉野見物ありて多武峯行ハ
大和巡覽記曰吉野山のりる六田入る本道あり吉野行人は先きの道より
入る飲貝の方より吉野の町へ登るそれより道あり本道も腹道も章
さうこれ実生と多く持出く往來の人より是むじの風と蔵王権現の御愛
樹もあん言つ〜り候ま

松山御茶屋古蹟 多武峯のりる八れ道の辺あり文禄二年二月廿五日豊臣秀吉吉野の
遊覧の時建のり御茶屋のりる此時の御詠哥世のりる

西六ノ四十一

日本花七曲の坂もいなき行りり入梅苗よりり
うらうらと推現奉るさうと十本と〜り候ま

吉野紀行

のり又十のりり〜り苦路は杖植ちりり成あてん

大納言 雅章

藤尾坂 俗に藤井坂とい 文治元年十一月十七日源義経の愛妾静藤尾坂と下り蔵王堂
大橋 吉野の町へ入りり豊臣秀頼公の御再建
高欄の葱宝珠の鏡と白

豊富朝臣秀頼御建立 奉行建部内近頭光重 慶長九年甲辰十一月吉日云

開屋花 藤井坂の右より 黒門 吉野の町の惣門
金鳥居 吉野の河の中より紫銅と以て造り 高さ二丈五尺柱の周二丈一尺
額發心門と書り 弘法大師の筆あり 是より二王門と凡三十余
千載 後らむその晩とものちの園もてり法ありり

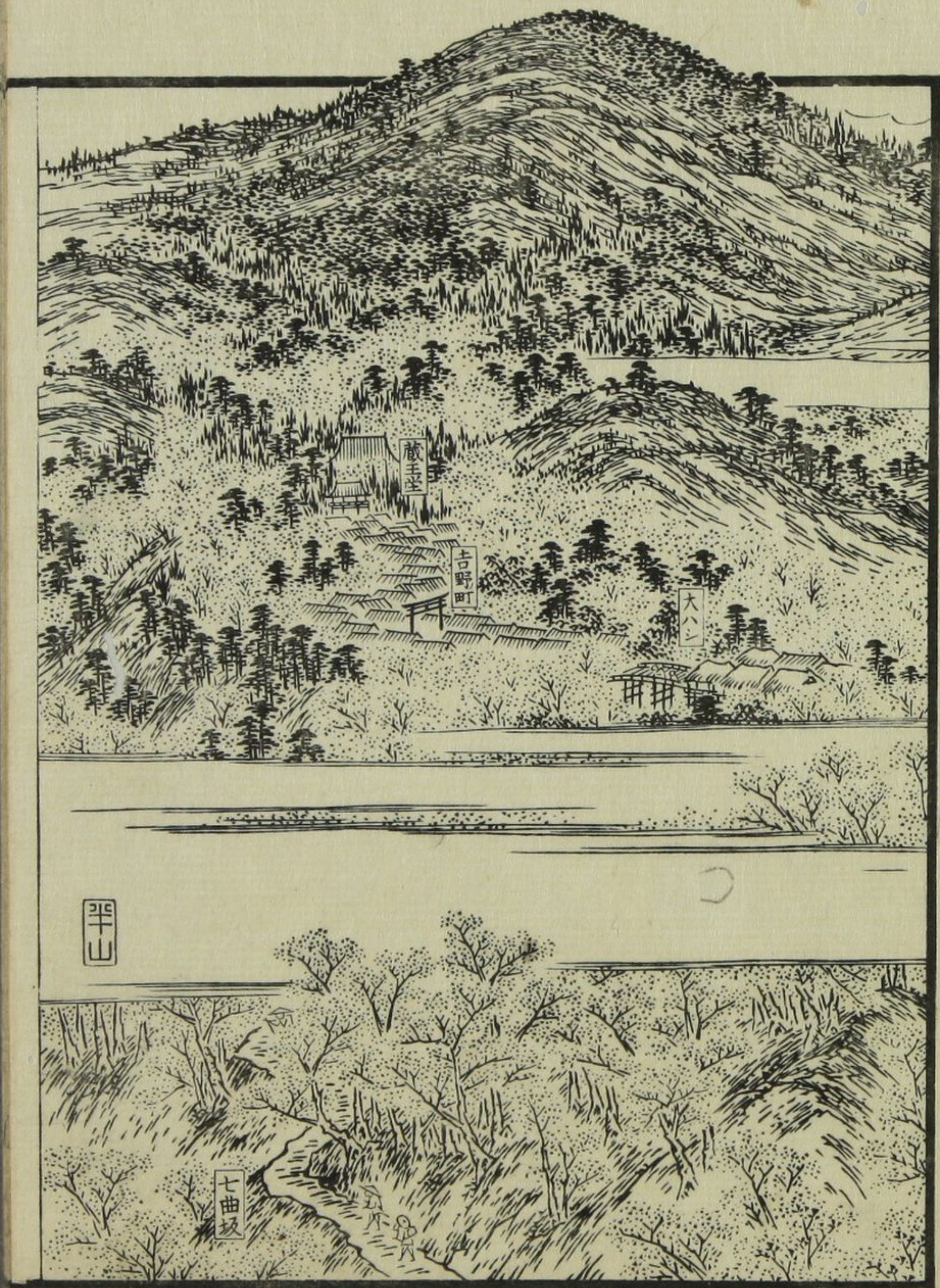
藤原教光

二王門 金剛力士の両像と安ん 運慶湛慶の作り 北面
國軸山金峯山寺 本堂 南面より土間高十丈一尺

本尊 蔵王権現 三躰あり安置り 長二丈六尺 魔障降伏の相也

不動明王 役行者本堂内安置り
躰躰佛の身体あり
右跡佛の身体あり
堂内右の前より周凡二抱半余り俗に立樹ありりり街昔諸堂
再建の時吉野郡榎尾村より寄附する所と云

躰躰大柱



平山

七曲坂

蔵主堂

古野町

大ハシ



吉野山長峰薬師堂

千本桜
七曲坂

人伝るるいふ
のやうて

吹島も

あり
むか

花彦
門左

義光碑

薬師堂

茶所

西六ノ四十二

観音堂 本堂の巽より 経蔵 観音堂の左あり

大塔古趾 本堂の西より礎石の上假堂と云ふ 三尊佛と云ふ
兼曆二年十一月金峯山の塔供養の事 釈書に見たり
本堂の前より大塔宮ありて舞樂を奏しひる所と云

四本櫻 本堂の西より礎石の上假堂と云ふ
大銅燈籠 四本桜の同より高凡一丈余 紫銅よりて造る
千躰地藏尊 正回石壇の下の傍より
惠心僧都の作 稲荷社 蛭子 大黒天社 回石壇の下
左の傍より

當山役行者の開基して文武天皇大寶元年の建立あり
神社考曰昔役行者吉野山に在る時神釈迦の像と現る行者曰此形衆生と

度一難一次に跡勒の像と現以尚曰未也次に蔵王権現出は甚怖るべは乃
負あり行者曰此我邦の能化也 蔵王権現二躰中尊の本地八釈迦如来

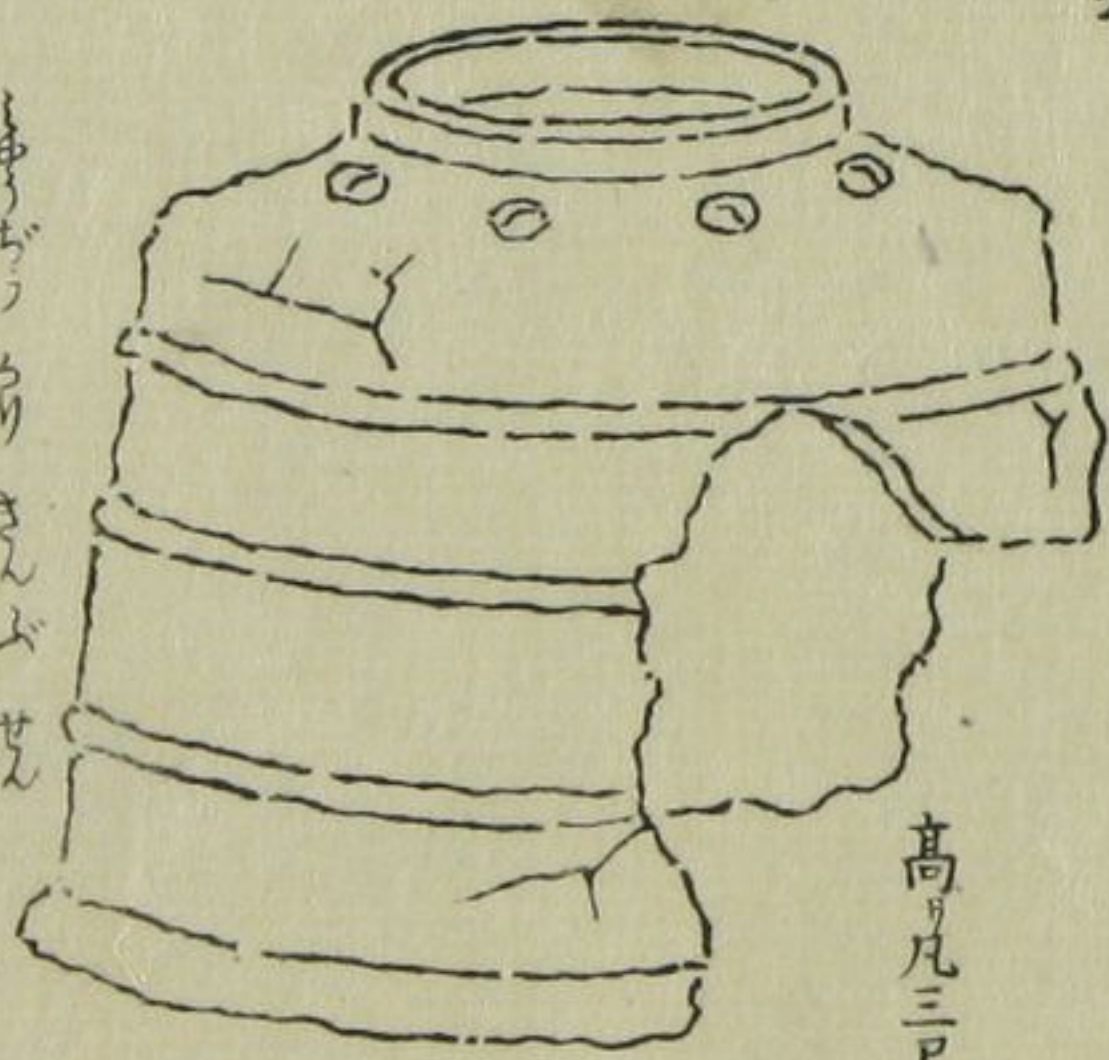
左本地千手観音右の本地八釈迦菩薩也 往昔伽藍巍々として貞和
五年正月十四越後守師恭武蔵守師直寄来る所一帝八天の河の真賀名

生の辺一落さるるいゝゝ焼拂てて皇后郷相雲容の宿所より火と
るる一程一丈五尺の金の鳥居金剛力士の二階の門北野天神社七十二間の

廻廊廿八所ありて蔵王堂一時小煙ありと太平記小見たり其より幸経て

豊臣秀吉公の時諸堂ありて成就と聞
其始り 蔵王堂 文武天皇 大宝元年建立 二玉門 天智天皇 白鳳十二年建之
金鳥居 醍醐天皇 昌泰元年建之ト云

大塔の古趾の傍に鐵具あり
按る小大塔の露盤の類ありて後
全焼破し見ゆ然れ先記に
貞和五年の兵火かゝる物あり



威徳天神社 本堂の右大塔古趾の
左に隣り

天慶四年八月沙門道賢と言りのり冥助を借て金峯山の
元来叙書

金剛蔵王菩薩小見の時五色の光ありて金峯山に照は其時道賢曰て
曰く此光はつるる祥瑞ありとやと蔵王の曰く今大政威徳天来らんとする相
ありと須臾の間に西方の空中より千萬人至りて来る其儀相衛護乃躰

巍々として見ても亦宛も王者の郊禮も似たり其衆奇の形異なる安
くして或ハ金剛力士のくく或ハ雷電神夜叉羅刹のどじ甚と怖るに類ひる
各器仗弓矢矛戟と持ちし時大政天蔵王とかく己アてまゝ歸り去んと
欲し道賢と顧て曰此人と將く我居處と見れば如何と蔵王許容せりさて
道賢として一の白馬に乗り行支數百里その疾く風のどじ一の大なる池
つり池の中小大なる嶋つり廣く百余里あり中小四方なる壇つり壇の中に
蓮華臺あり臺の上寶塔つり塔中小妙法蓮華經と安げ塔の東西壁小
西部の曼陀羅と懸くその塔の嚴奇麗ある言も述べは北の大城あり
城門の禁制衛護の躰もく嚴密として人衆多く列もきり時大政天
道賢と結して曰我は上人の本國の管丞相あり忉利天帝我一字して日本
大政威徳天と呼ぶ我譯言に依り配流せり時あつと動するに依り
我國土の一切疾病災難の事と主と我君臣と惱り人民と傷らんと欲し
又思ひて我生前悲位の候と以て化して大雨とは本國と浸して水海

く八十四章を経て國土と成りて我住城とせん然も此國普賢
龍猛の密教と流傳しつる地あり又應化の諸聖悲願カと以て名と明神借
諸所遊行住在して普く衆生と覆護し彼諸の名神常と我と慰諭せり
我又佛教と愛重し故に巨の害滅るべ但し我十六万八千の諸乃眷屬
暴惡の鬼神等ハ處に隨つて災と辱に我あて是と禁制し我神
慰と受て法樂と味し昔日の怨懟今ハ少く息も亦と道賢の曰
我國の人民俱ハ火雷神と稱して尊重禮敬とて世尊と瞻仰とる
何と怨りりやと大政天の曰く國俗我と以てすて仇讎とせり
誰らてて尊敬せんや又火雷神ハ我第二の使者と火雷氣毒王との
者あり是我名に依り我在世の時歴するの宦位人の是に居る
あま我つて害意と起は是昔の怨の甚くは因てり然る今一の
誓とまゝ本邦も遺りて上人あまを傳てて普く世に流布せり
下若人我形と依り我名と稱して慇懃ハ尊重せ我必ら彼と擁護



してん若人上人の言を聞く既信受一崇奉せ我又上言とてその害を
 為さずば夫れも道賢ハ金峯にわたり上伴の事と陳せりし蔵王の曰く
 我女として彼城にむいひ見せしむる世間災難の根本と知れん為ありと云
 道賢此時を日藏と更む余後上人當社と造る威徳天神宮と鎮奉也也
花供懺法會式 例年二月朔日 餅搗 正月廿一日より廿八日に至る
 抑此二月會式といふ俗に花供懺法と稱する事と當山の太礼あり則ち蔵王
 権現の祭式天下泰平五穀成就の祈禱あり先其例式のゆへは正月廿六日
 より廿八日まで二ヶ日の間吉水院寺僧方云天台宗也是と花供と稱し密乘院蔵堂
 眞言宗也是と 兩院の行行正頭部屋云山新設意に於て餅と搗事廿石
 天台方廿石
 行行板敷の上より白米を櫻子と作り杵と以て数多の役人群がり是を搗く
 持千本あり俗に右の搗者ハ其婆頭ハ烏帽子のものを被り其上に白布を
 包み目をくり出して残らぬ面を覆ふ身ハ筒袖の白衣を着し注連縄を以て
 禪の凡て米を洗い亂して奉り白米を搗りて鏡の数とせりて神と

供むるまで聊も手とてある事あり皆抄子箸ホを以て取扱ふも嚴重あり余後
 蔵王権現といふ満山の堂社の餅と供し御供神酒も供す
絶行 正月廿七日西花供懺法の兩頭坊より米十石と施行せられ依て近國
 邊郷の貧人を巧彫り群集しちまきとて行事雲霞の
 二月朔日卯の刻御供餅の擗ハ基一沓より四基あり凡八人てそれとて
 前寺院の高張の灯の数多敷置 蔵王堂に
 昇来すてろを供す○早朝敷山の僧正来りて天台方の学頭の坊に入同
 南都より出役方二頭来りて石壇の上の役所に着
 同辰の刻當屋衆四人 餅搗と主る家々黒頭巾の紋つとて冠身ハ梅の大紋
 次懺法講中 上下を着し一方臺に五色の餅を盛り正中に 次正頭行人 淨衣五條袈裟
 鎧五十筋 三傘一本 毛鎧八筋 行 挾箱 十對 一流僧徒 西儀も位應下
 五條袈裟素絹の 一鴈二鴈三鴈四鴈 衆物若黨八人伴僧二人先挾箱後挾箱
 類も有山列大勢 町家より崇敬の供奉人上下を着し大勢ありて此行列の 花供講中 蔵王講中 懺法講中
 あり青竹となごる藝圖の從者左右大勢列に 種々の供物 當日役寺僧 衆物若黨二人先挾箱 蔵王堂の石壇より一町をり手前
 下乘一花四散華と盛て道路に散す 神主 鳥帽子狩衣 懺法方 廿人 花供方 同
 廿着

両派の俗人までも、右の行烈つづれも蔵王堂に系すて夫々の祭式ありて蔵王堂の由緒の家ありて
 於て一山の僧徒と初め諸國兩派の修験者堂内に充満して修法勤行嚴なり
 午の下一刻に至り堂前四本櫻の傍の舞臺にわづ猿樂と奏は
 常は會式より後却供の餅とさげて四回撒くは夥し是吉野の例年まつり也
 餅撒くは其構一間半四方より高さ二尺余りの床の上四方に手すりの高欄ありて
 右吉野在家の俗人より由緒ある回家の人より則ち諸國に出て花供職法の進進す役家又右人の内二人黒頭の鬼の面をかぶり姿も鬼形にして餅をさす傍に舞臺ありて
 又暮つ時より五ツ時ごろまで蔵王堂前の石壇より左の
 餅配 是御供の餅とさげて一山の寺院毎より且吉野中の人家毎より餅を配りて是をその上堂前にて事ありて
 花會式 例年六月七日俗に蛙飛の神事ありて
 六月七日己の刻真言一派の僧徒蔵王堂に出勤は此時正頭の行人一人蛙の袈束を着し堂内に居る稍く僧徒讀經修法あり既に修法終らんとする時
 二賜の僧徒蔵王堂に系する午の刻より一派の僧徒下の一の蔵王堂 長峯の神



花供職法會式の餅搗
 二月會式の餅搗は吉野の坊中
 滿堂寺僧方の兩院の正頭
 部屋の板敷の上にて是を搗く
 正月廿六日より廿八日まで二日の
 間餅米の都合九四名人数千人
 杵十本是旧例に云
 都合八輿
 御供餅の糰
 凡尺四寸許
 五色に搗る
 餅と稱盛て
 是のせに入して解て
 蔵王堂に供ふ



西六十八



平山



藏法講中
共五人
許

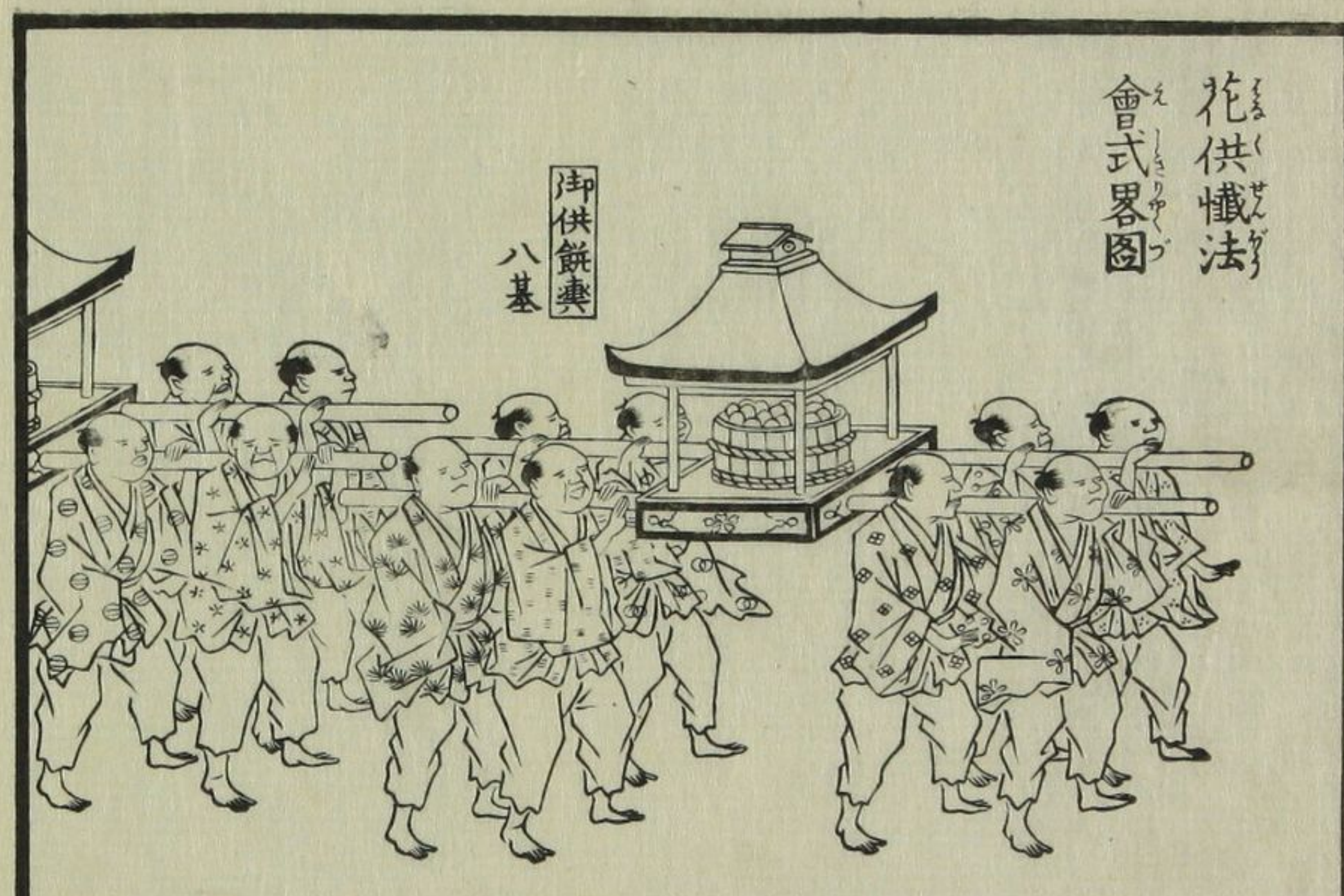
當屋衆
四人



花供講中
大勢

藏王講中
大勢

藏法講中
大勢



花供懺法
會式畧圖

御供饒賽
八基

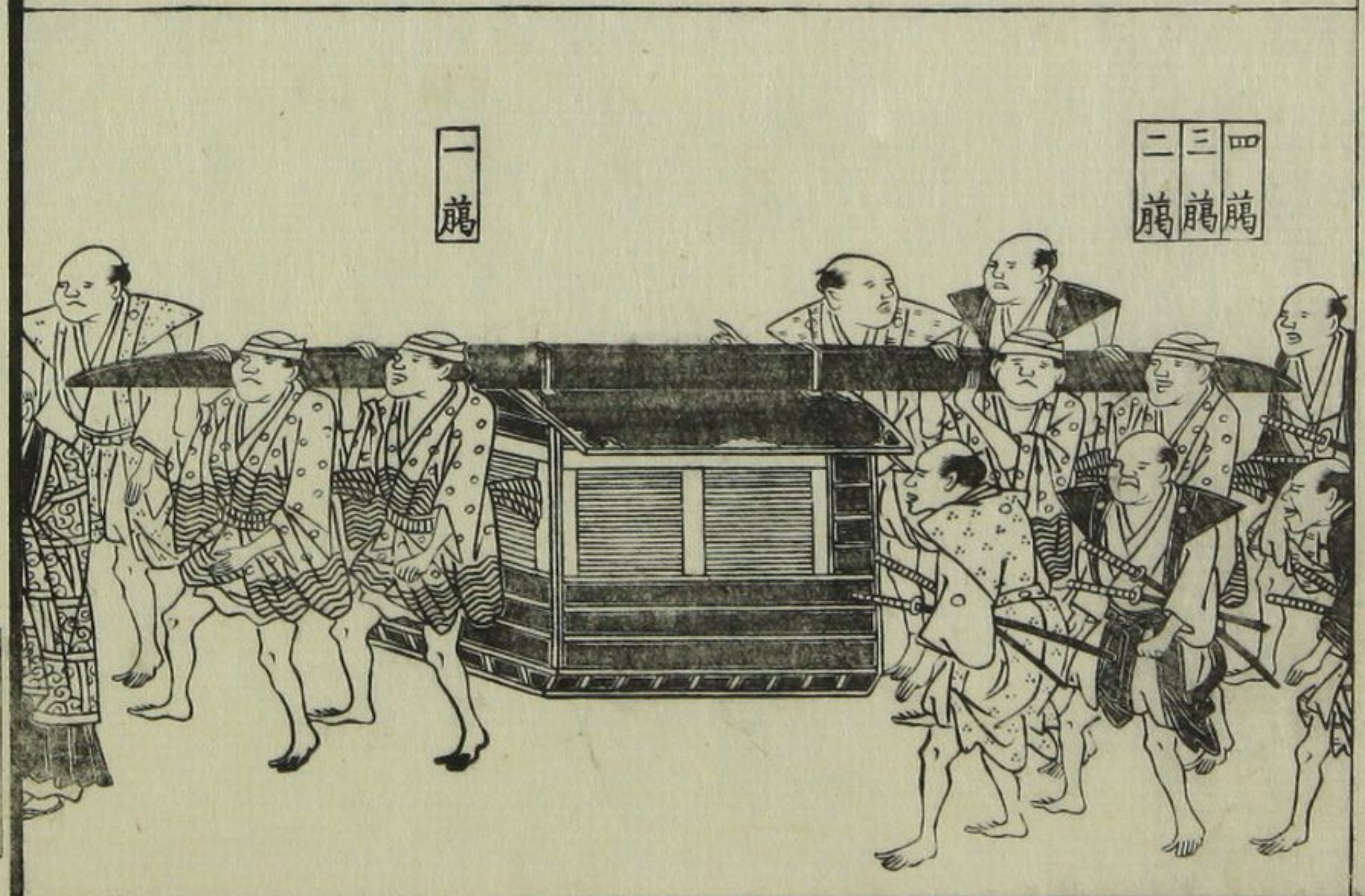
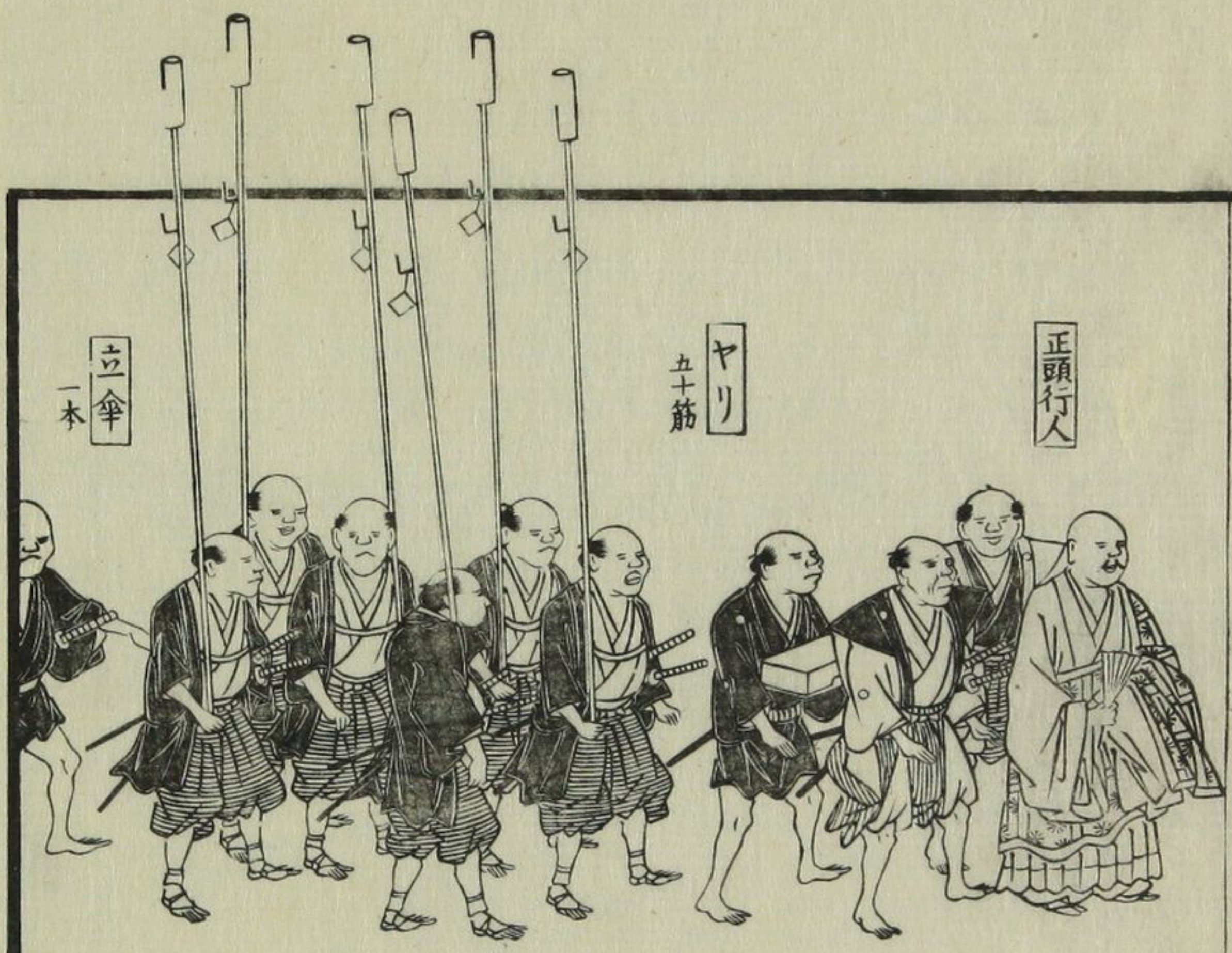


花供方
懺法方
大勢

神主

當役寺僧

平山



蔵王堂蛙飛修法

芭化
草の
蛙
言水



輿と迎ひて至る余後神輿とむく奉りて蔵王堂に遷り是と祭依とて
未の刻に及ぶ○又酉の刻より一沝の僧徒出勤して修法のり斯く一鴈乃
僧蛙の行人に秘文を授く是より忽ち正氣を失ひ萬端蛙の所作と成
行人兩人づ壇に登りて蛙を呼て秘文を授く此式行人許多立かき屢
行ふ始終蛙の形勢と此彼に飛りぐる人心を失ふ一鴈終夜修法のりて翌
朝に至りて全く終る蛙の行人も又本心に帰る此修法の法も秘密此義の
聞るは是よりして昼夜とも遠近より系詣群集して賑り諸又翌朝一沝乃
僧徒神輿を送りて一の蔵王堂に納む

吉野山

一名 金御嶽 又名 金峯山 又名 國軸山
南北深遠して量るべ
東西凡一峯二里許也ト云
拾芥抄曰 天竺佛生國のりて關ありて飛來て此山とありと日藏上人の傳
も見たり又の説は唐土の五臺山の岸の端うけて雲に乗れ飛來るも
江中納言のみまけ御塔の御願文も斯く記さるれ又貞宗禪
師は唐土に金峯山とて金剛蔵王の住のいし山あり此山爰に飛來て金峯山と

あつしと書れり 抒吉野山満山桜樹して花時、積雪の朝のびに、騷入墨客
あつし遊賞、其名中華、聞て天下の名勝ありき

義梵六帖云日本國都城南五百余里有金峯山頂上有金剛藏王菩薩第一

靈異山有松檜名花軟草大小寺數百節行高道者居之不曾有女人得上

至今男子欲上三月斷肉食欲色所求皆遂云菩薩是弥勒化身如五臺文

珠 本朝七高山の内、其王も黄金なり因り金御嶽と稱し聖武天皇東大

寺の大佛と鑄んと欲し、其の金を求めり、時良辨僧正に紹して、當山に金を

求りむるに、藏王権現此山の金を取出り、莫きと告げし、其のついでに

萬葉 見吉野乃山下風之寒久爾為當也、今夜毛我獨宿牟

古今 之芳野、此山を、一、つ、様を、まを、り、し、て、り、や、ま、り、る、

吉野川 水源大臺原山より流れて塩乗、伯母谷、尋古大瀧と經り、東川といふ、西名遊副川といふ、

新住と經り、宇智川といふ、之、吉野川、三吉野の大河、淀み、練り、

和州順覽記

吉野川その水上と尋ねき、津の瀧く、萩の下露と、練る如く、源ハ二所、ハ、

く、ハ、を、思、し、但、西、風、ハ、東、水、多、く、流、生、て、宮、川、の、水、を、増、る、東、風、ハ、

吉野川の水も、北風ハ、熊野河の水多し、故ハ、東風ハ、げ、も、れ、

雨降、れ、て、吉野河の水、ゆる、り、上、市、り、下、河、の、渡、り、廣、く、

紀の川あり、紀州和哥浦へ出流す

萬葉 今敷者見、目屋跡念之、之、芳野之、大川、余、抒、乎、今、日、見、鶴、鴨、

古今 吉野川、岩の、疑、や、く、風、ハ、底、に、影、を、さ、す、り、ひ、に、あ、る、

實城院 又ハ、金輪寺、も、云、建、武、二、年、り、後、醍、醐、天、皇、皇、居、定、り、

北朝と南朝、相、り、れ、幸、号、す、て、兩、朝、り、出、さ、れ、同、か、び、天、皇、勅、し、新、葉、和、哥、集、

撰、れ、り、又、御、手、づ、く、茶、入、十、二、と、刺、せ、り、或、ハ、世、是、と、世、金、輪、寺、と、云、た、漆、器、と、い、ひ、

あ、り、勅、作、の、品、ら、ん、金、輪、寺、也、ら、い、て、茶、湯、も、有、り、聞、也、南、朝、四、世、五、十、二、年、此、間、

の、皇、居、の、地、に、て、則、其、時、の、皇、居、の、傍、に、作、り、し、る、程、ハ、殿、屋、美、麗、し、て、後、世、乃、

及ぶ事ども尋常の御座も有て貴一 帝の時辺りの美景と詠りゆ

かたは淋しかりと雲をねねを所乃興はる月雨のそを 後醍醐天皇

横笛一管 鉦三管 執笠二管 羊皮鼓一面 尚此余種々ありてのるる畧に當院一山の政所

櫻雲記曰

南朝興國二年 北京曆 新帝 上 後村 吉野と帝都とすして行宮殿閣を月

郷雲容微少して昇進除日殆断絶せんは於是二月下旬源親房常陸小田原城

居て職原抄二卷を作て吉野へ献奉る百官諸位職掌と指ぐし未代に至つて

帝都の龜鑑とひびび親房郷博識宏才にして今東國に於て文藻一軸も不従

して輒くあれと著はてし凡愚のちと所はるべし

吉水院

蔵王堂のせり先の町より 當院も後醍醐帝の行宮として建武元年二月の

遺券呈文あり又正平弘和元中明徳の奉回賜の所論旨をひ越智家頼筒井

順慶の願文あり抑此寺の草創は役行者山上修行の時姑息の庵室あり其のち

醍醐の聖寶尊師も此院とありの如く源平兵乱は源義経辨慶も此に

誓一軍議と謀るこ二年及ぶて其居席今一破壊せむ徒前ハ駒掛足

蹴武蔵坊が力釘今其形と遺は往昔文治元年源義経大物の浦より風波に難と

のれ此山に登り夜入て密に此寺あり吉野法師お義経と討んとせ也又此寺に出

中院谷お隠きに悪徒おちも跡と求め来りれば佐藤忠信と残して防矢と射

させ静と捨て武峰より十字坊入是より又十津川に落つて也又後醍醐

帝京都と建きさせの此山に潜幸あり時先當院へ行幸ありて行宮とし後

實城院に移りて此院の床成御枕と詠めし御哥

花はねとや言ひゆりしあはれ枕の下みるる 後醍醐天皇

後醍醐天皇御物 竹之御文臺 同竹之御硯箱 當院の付室は尚此余種々あり畧之

秋齊閑語ニ云

吉野山吉水院より有太平記吉水法印宗信より此住持と後醍醐

天皇の姫宮と下され妻帯りしが今清僧の寺におまゐり此寺親房は自筆の

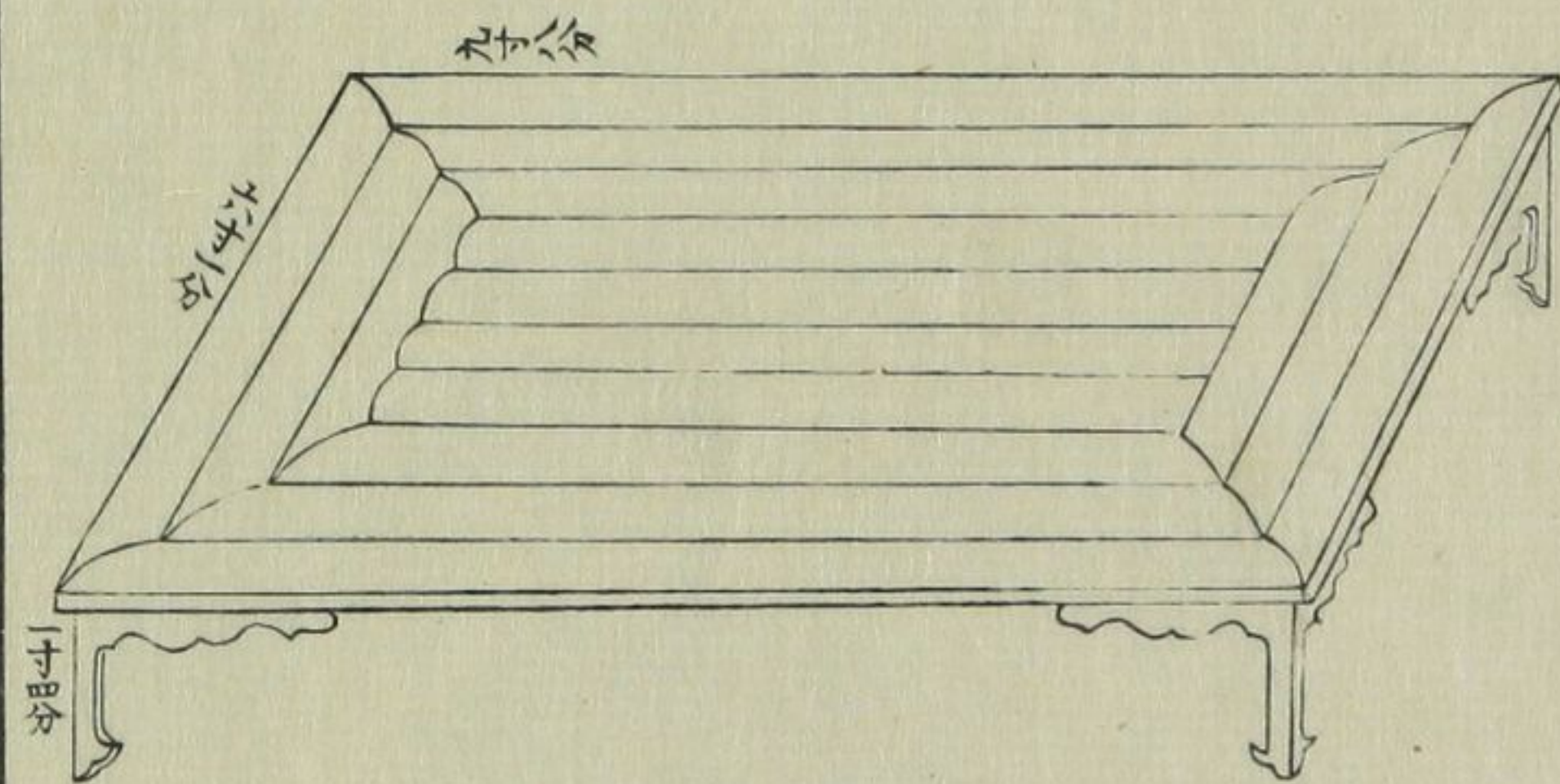
職原抄より今按る吉野拾遺にみし野の山守とて今の日有て花は咲かん

と後醍醐帝の尋ひさせりし御返り花さかん頃ハのりも白雲乃わらむ
 志すべし山と申上る寺の事

後醍醐帝

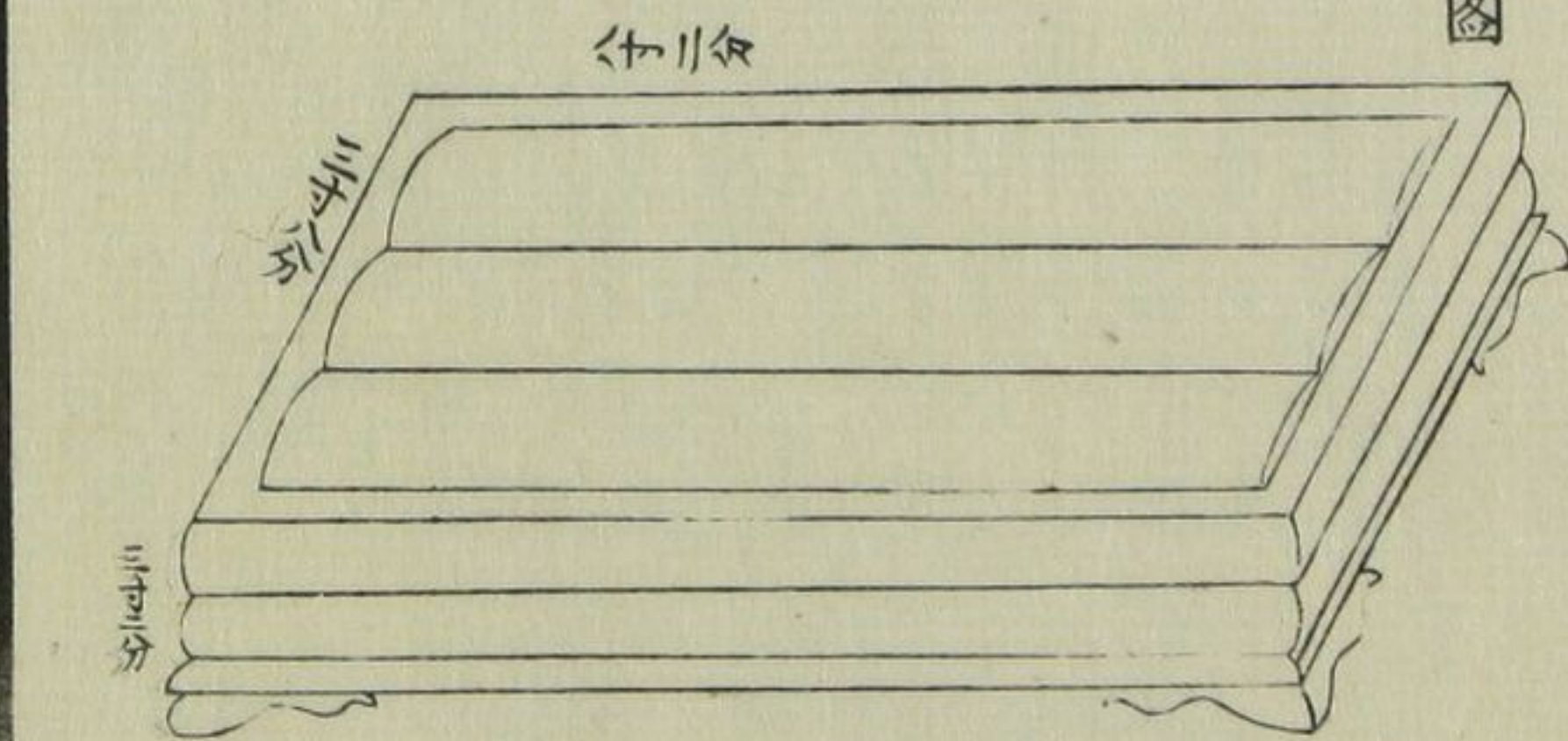
御物

竹文臺之圖



同竹硯箱之圖

内黒塗



尚道く八豊太閤も吉野花見の時此院へ入せりてあし聞ゆ

馱天山

藏王堂へ遊ば朝の魚 馱天山の東の方あり 五臺寺 燈爐の辻あり 右の方あり

續後拾遺

櫻本坊

共燈爐辻より右の方あり大峯當山の先達して

後醍醐天皇御幡一流

楠判官正成矢筒

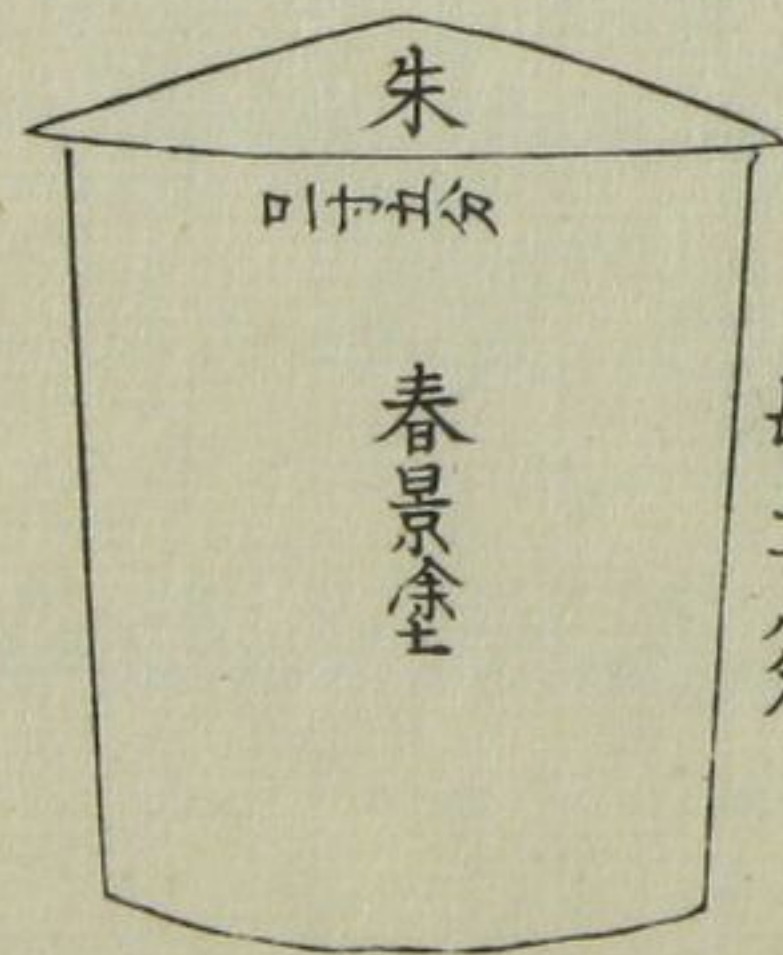
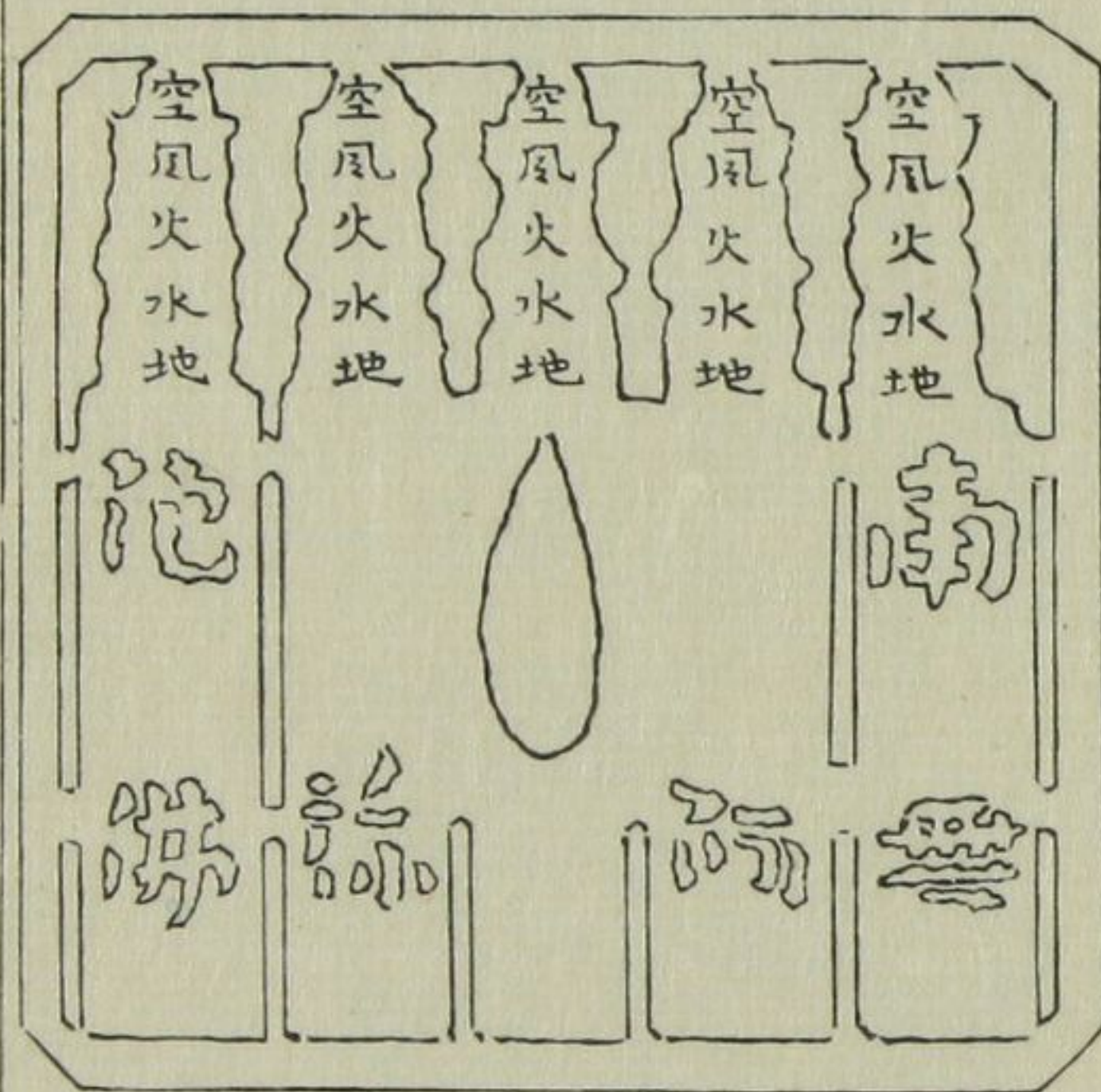
劔一振

續高條行光作 元慶三年の銘有

後醍醐帝御初作 金輪寺茶入

長サ一十八分

村上義光 所持 五本平都 婆之鐔圖



以篤造

裏物黒塗

勝手神社



天孫臨降の時卅二神相をひて天降マナ次一護國後見一降マノ卅二神也
六十四神式曰愛髪曼命ハ勝手大明神也

又文治元年静法樂の舞を奏し瓊束ちびり源義経の鎧を寶藏に
納す是正保年間の火災一焼失せしを惜むアト云。順覽記

按大和名所圖會云 延尉源義経公の愛妾静御前ハ勝手の社前して法
衆の舞を奏し衆徒の心と湯り義経主従十二騎を落せし誠一及を用ひ
して勝成全しとるハ六韜文伐の篇の與義もつひつとる者れト云

然るに義経記詳判ハ文治元年十二月十六日の昼の程一静ハ吉野より
判官一離れ剣を都まで送きしとて附与せし下部の者ども心變りて
賜る所の重宝を盗りて静を捨り逐電に静ハ為方かく泣くはその夜ハ
終夜山路を迷ひ翌十七日の暮まで一人吉野に漂ひて終に蔵王堂の前ハ
至り途途の道者よまされて俱に推現と念しつ何れを此度安穩に都へ
返りの又何れを別き一判官と事おわく今一回引りしとせりともいふ

母の前司と態々糸々んと祈りたる道者比下向して後静正面と糸々て
念誦して居りたるに大衆亦是と見つて何事とわれ権現の御前とて
御法樂のうへへ勸むる小辞退ぐと我と見とる人かもゆじと思ひれば
多々習い知なればも別と白拍子の上手と有れば音曲もどうも心も
詞も及ばぬ用人涙と流し袖とまぢりぬ無事なり終り斯を佩ひたり

わづのすさるん乃ふらぬとあやまきのゆへは恋し糸有て離れ面影とつもの
世々忘るごと別と殊と悲し親の別と子と別と勝もて実悲しきん
夫妻の別れありり涙の頻りすもれば衣引ぶと伏しり斯直程と
衆徒のめんく其音聲奉止と感入是凡人有るべし経綫すちくある
所一人見知る僧徒ゆりて是静ありと申しり稍て捕て判官の行方と
問静終はほむれ由あり有の中と詔りり之修行の坊と取て漸々に
つらり其日一日とめて明れば馬のせて人をつち北白川と送りも是は
衆徒の情とを申りり此條とて勝手の社前とて穴を宝庫と蔵め

られ舞の装束ありの蔵王堂とて奏せし時の品々んと然もも落人のい
殊一山中一人棄れ身身の装束の有るも覺不又静が白状して判官當
山に匿ま有るとあり大衆未討人向て見れば判官と落んが為舞と奏
せしも聞不未其是非決せば後の考と候の

太平記云 王上勝手の宮の御前と過させのひり時寮の御馬よりとらせ
のひり御前の中一首斯と思召はるもさせのひり
笑むるひき付ても誓ひて持はれ神乃名も怪れ 後村上天皇

是ハ則ち貞和五年正月十四日高武蔵守師直二万余騎の軍勢と平々
吉野の皇居に襲ひ来るゆり王上 後村上天皇 大河の眞賀名生の辺に御忍びひり
て黒木の御所と出させの御時の事然る和州跡幽考ハ後醍醐
天皇賀名生の辺に落させの時より大和名所國會も同是ハ回跡幽考の
中書寫せし後醍醐天皇ハ延元二年八月十六日に崩御 太平記 貞和五年
十二年以後とて南朝二世後村上天皇の御代あり

師兼十首

三吉野や傍りのまはらぶがの神うつりつるがもぬのりそ

古鐘

鳥居の左の下より今蓮土中埋て手水鉢とら
勅曰永録八事己丑八月九日

土中と出る事一尺九寸
の徑一尺九寸

弘化五年追二百八十四年及ハリ

袖振山

勝手のやうなよ友あり
此山の頂上と那良志山
このやうな天女の舞を奉る
よ名づくること

本朝月令白淨御原天皇

吉野の宮よりして目暮の

琴と弾ひひひと奥のり

乃り俄々峰の下より雲氣

忽ち起り神女の形あり人

勢鬚して曲つ應じて舞

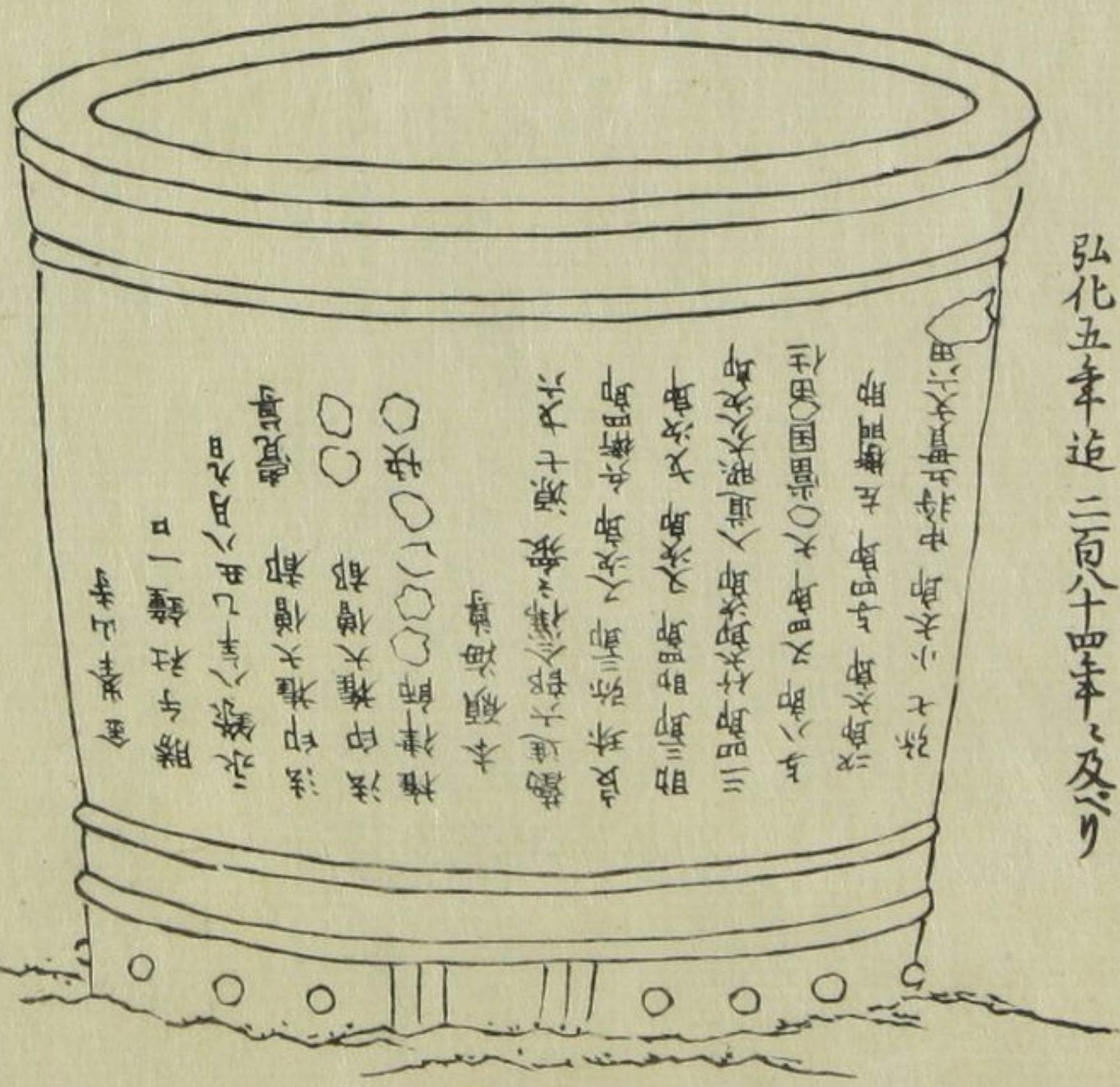
あり他の人に見るごとく得ん

天の羽衣の袖と五度翻して廻

し女子ありありと王と柱

まはれおのりひひひと視ひる

五節の舞の振えあり袖つるや



西六ノ五十七

吉野拾遺

吉野拾遺

先帝豊明の節會とせむせのつに余り一形ごりある有様と思ひあげせ

のひり流小袖振山の目近く見へてさうちる

袖はははは女も思ひも去野乃まはむりかごと

後醍醐天皇

と打詠めさ月更るもむねへりゆりゆり御夢もろく袖振山のより白雲

棚ひとて南殿の御庭乃冬枯梅の梢にさやうも流は夫とてさうちるあか

やせのつふふし女の姿乃うちまほむさう

かれをぬもやうさ舞寝てけし女れ袖のちりも

とあり詠じ雲隠れまると御覧もわさせのつ御らうらむをげり

渡せのひ御りさほの忘られごと

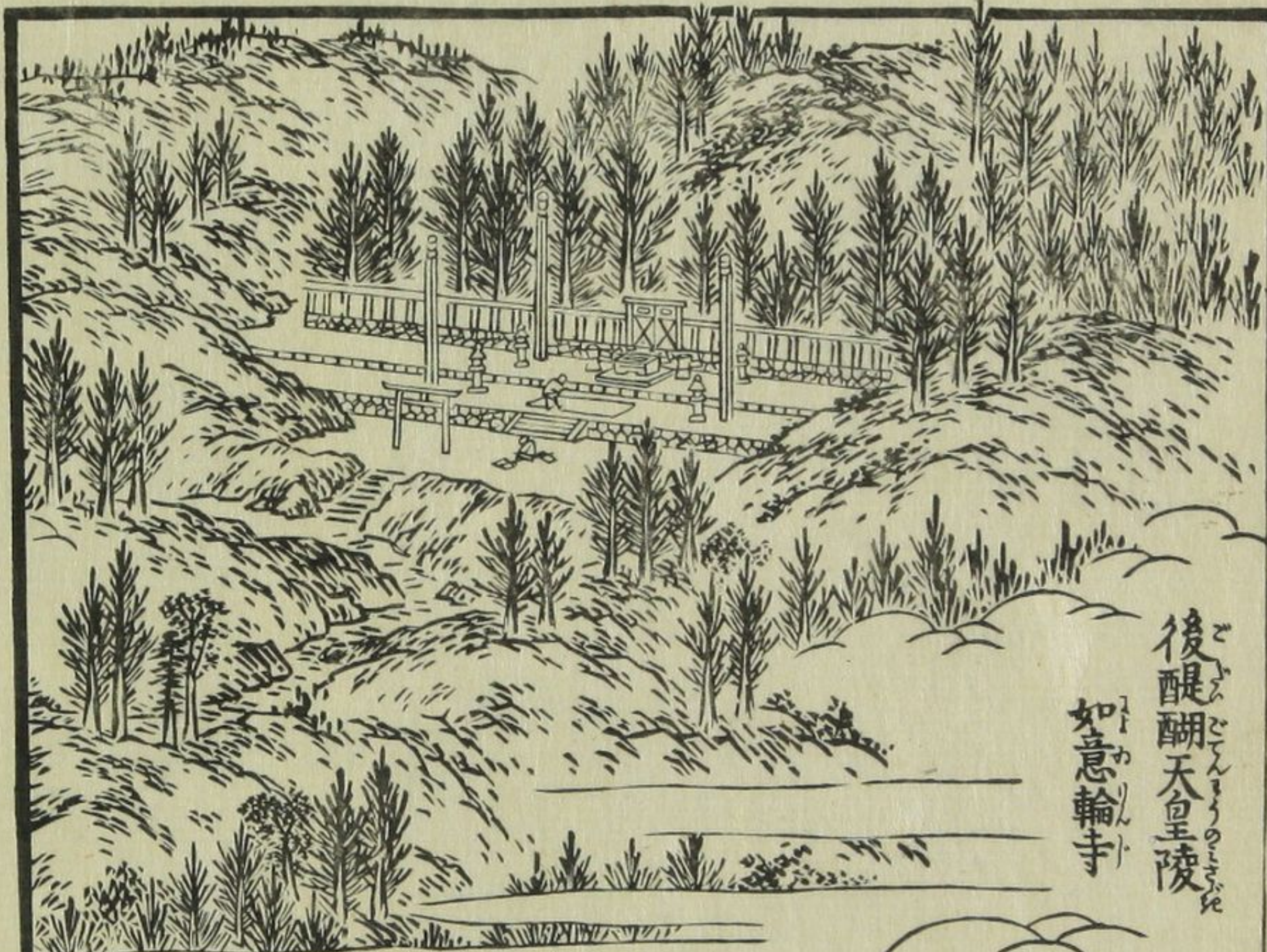
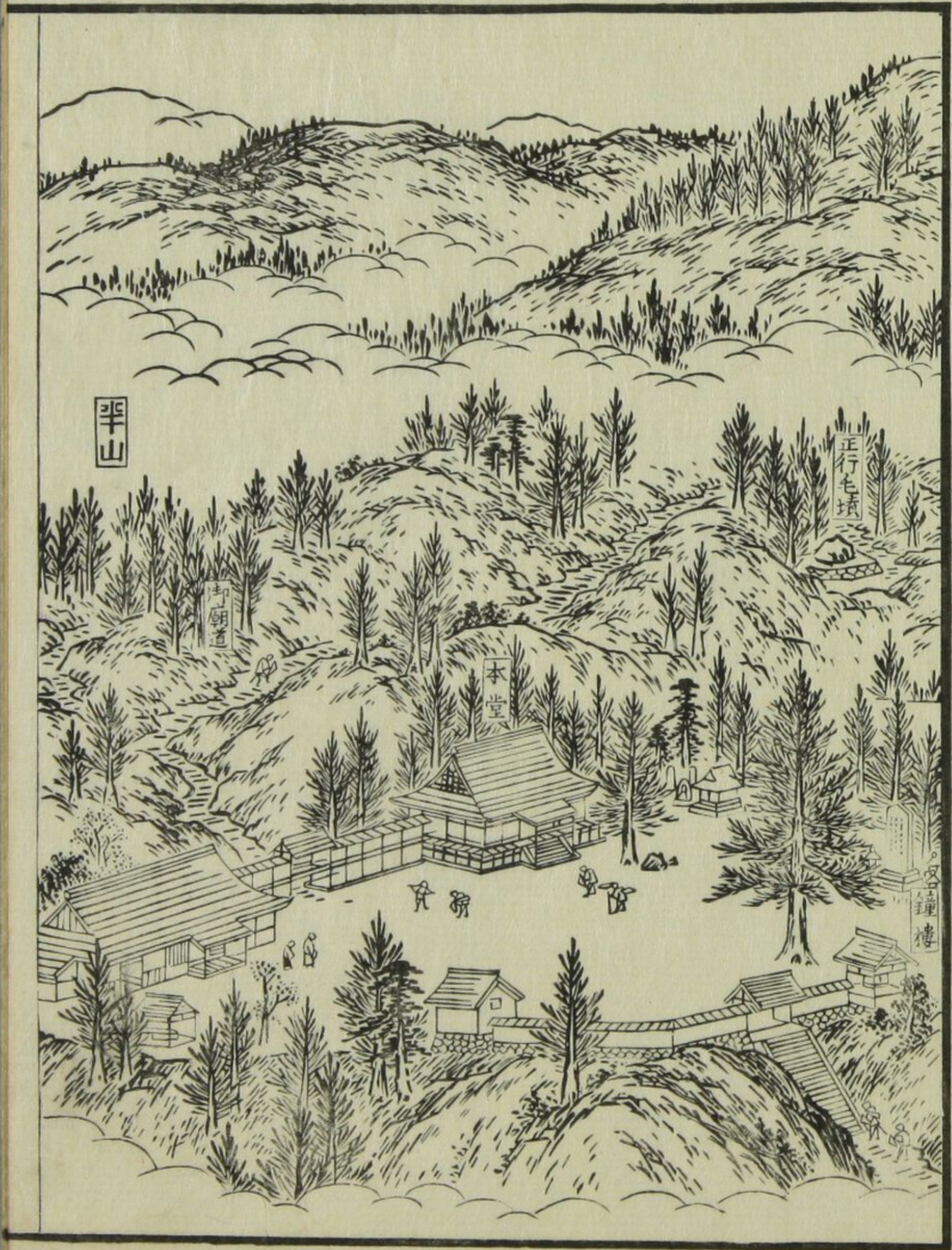
塔尾山如意輪寺

勝手の社の東の方谷の向ふ山あり白藏上人開基也ト云 當時浄土宗

本尊 如意輪觀世音 安阿陀杖 左脇檀 十劫阿陀如来 傳教大師作

後醍醐天皇御自作藏王権現尊像

御厨子の形は吉野三熊野の熊野の面図あり 甚く後醍醐帝宸翰と御讃の侍り次第に



後醍醐天皇皇陵
如意輪寺



後醍醐天皇の陵のやうに、樹と千本
推んと松のひして、幸しく、植の味と
植とて、松の下もみ、け
南寺、けり、と、む、や、ゆ、えん
栗田久盛朝臣

山とむり、坂と下海、林の、日、味、料、料、小
あれ、だ、ん、ら、る、再、と、え、の、く、て、す、の
後醍醐天皇のみ、と、た、と、あ、む

分書、う、も、も
ま、ち、い
と、の、い、ふ
ま、考

後醍醐天皇御宸筆の讀二曰

晴岬月前為教主 金峯嵐底現藏王 斑荊禪客安居砌 緇素群焉滿願望

慈風扇境四流渴 惑霧晴心六度差 碧樹集雲飛鷲嶺 黃金敷地掣龍華

風月澄心丈道祖 火雷宥忿法陀尊 日藏聖感瑞夢處 大政天為教海繫

兩山梯峻古仙跡 四海船浮權化神 行積僧祇鑒末世 威政鬼類縛其身

又御硯箱あり天皇平日小御手馴ゆ所とて

正行鍬辞世の歌 塔の扉鍬とて記し今尚存く付室の扉幕列真の記

正行毛墳 寺の後上方あり是も辞世の歌と記す時鬘髮とて佛殿に投入其日吉野と

後醍醐天皇陵 寺のじろの山より廟前なる玉垣石の鳥居石燈爐あり又左右の傍に

奉為 後醍醐天皇尊儀五百回聖已威光倍增鎮護國家也

天保八丁酉八月十六日豫修造立

南朝の奉號延元二年八月九日より吉野の主上御不豫の御事あり

りる次第小重とせのい終り八月十六日の丑刻に崩御成りりり葬禮の御事兼て

遺勅のりり御終焉の御形と改めば推擲と厚く御座と正して吉野山の

麓藏王堂の良む林の真上田丘と高く築て北向に葬り奉る同十一月五日南朝に

群臣相議して先帝の尊號と奉る御在位の風教多く延喜の聖代と追われり

後醍醐天皇と謚し奉る多し 太平記一説に延元四年壽五十一又前王廟陵記に云延

元二年北朝曆應二年也時御年五十一有然つれ延元二年の曆應元年也曆應

二年すれ延元四年也或正應元年十月二日御誕生りり説に延元二年と

五十一とす

本朝通紀曰 後醍醐天皇崩於吉野時壽五十一此日捕正行歳以一千七百餘騎

衛禁裡和田新二郎歳卒二百騎警固諸門

貞和二年十二月廿七日捕帶刀正行舍弟正時一族打連て芳野の皇居一系ト龍顔と

拜奉り是も最期の泰内と思ひ定て退出正行正時和田新茂意舎弟新兵衛同紀六

左衛門子息二入野田郎子息二入楠將監西河子息開地良圓以下今度の軍一足も

了べ一處も討死せん約束りる兵百四十二人先皇の御廟一系今度軍難義

あつた討死仕立を暇申て如意輪堂の壁板に各名字と過去帳小書連綴其奥に

各留半座乗花臺 待我陶浮同行人

んごを抄く人をはやせんむの蓮花もちをゆり

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國と

正行筆成りて書りてあり云

且又此時正行塔の扉に鏤と以て辭世の和歌を記し者今尚存して寺に傳る然るに去未年攝州池田住山川正宜あれを寫して摹刻考訂の言及び賞賛の和歌成りて世に弘くせりいふ是を得てあり出

南山遺馨引

是正行朝臣當時以北軍日振豫知其不能克臨捐命報國之期取作而古來傳謂堂壁矣然今猶存之塔扉者甲觀焉近或識之者謬句公摹刻則失真曰茲余更所以及此幸也

按公戰死也太平記曰正平四年北朝貞和五年正月五日則來戊申當五百年也然園大曆等為云幸故近世多據之而未知其孰是為公幸齒亦諸說不同但其中正平三年為廿二者似得安

かろしうのた

おりの梓弓

ふ紀叔小入

るをそ

むふ

吉野山如意輪寺廢塔扉楠金吾和哥也所遺誠心於鐵痕而世罕知焉
故今摹刻以弘于四方爾

與志能也麻義禰延由幾麻爾保比氣辛古止婆廼
波奈乃以万毛加乎里且

丁未冬錄之

伊居太 源正宣

延元五年夏五月北軍の爲に龍泉赤坂の城を責落し南軍志づく利を
失ふより主上親心寺にありて安んず御心も有せられ女院皇后月郷雲客
只薄氷と踏む時二條禪定殿下の候今と有り上北面此形勢と見え敵乃
この近づくる前小妻子ももも京の方へ送り遣し我身も今ハ髪と切て何る
山林も世と道れを思ひて吉野辺まで出でらんをせめて今度先帝の御廟へ
系り出家の暇も申さんと思ひて只一人御廟へ参りて圓丘の前へ寝てつら
世の中の成行と素直つ少く目睡たる夢の中御廟の震動する事良久暫く
有て圓丘の中へ誠けけられた御声と人やりのと召れらるる東西の山打峯より
俊基資朝是候とて参りて此人の君の御謀叛申勸りて者も也とて

去る元徳二年五月廿九日資朝は佐渡國にて斬られ俊基は其後鎌倉に高
原が岡にて上藤二郎左衛門尉小切き一人也貌と見え正昔見たりし體
こそ有るが面は朱と差くく眼の光耀ひて左右の牙銀針とまき如
上下は生達ひく其後圓丘の石の扉と挑く音けられ遙く向上より先帝
哀龍の御衣と召き寶劍と抜て右の御手より玉匣の上へ坐し給ふ此御容も
昔の龍顔に替りて念まる御眸送り裂け御鬚左右分きて只夜叉羅刹の如
く誠小苦げある御息とつせの度毎小御口より燐と燃出て黒烟天に立
上る暫く有る主上俊基資朝の御前近く召き儲も君と惱み世と乱る逆臣
ども誰の命と罰に哉と勅問はるる俊基資朝此事ハとて以摩醯修羅王
の前にて議定つて討手と定められて候とて何と定めらるる問せの先
今南方の皇居と襲りては候と五幾七道の朝敵ども正成に申付て
候と二兩日の間に追返し候とん仁木右京大夫義長と菊池入道愚鑑
に申付て候と伊勢國とて亡び候とん細川相模守清氏と土居得能に

吉野の陵、俊基
 資朝の靈魔
 軍の指揮と奏
 儀



二日争光南北天
 誰圖一日没南山
 松楸四百年々晚
 芳野山鴉不喚還

荒井公麻廉平



申付て候へば四國小渡つゝ後亡び候へば東國の大將と罷上り候へば富山入道
舎弟尾張守と殊更嗔恚強盛の大魔王新田左兵衛佐義貞と申請候へば
罰はつゝし申候へば輒にさへ候へば道誓を良従とせし所
首と剣とせ候へば中江下野守同遠江守二人殊更悪奴と候
へ竜の口とて我手より切候へばこそ申候はせと奏し申り
主上誠に御心より打咤を給ひ候へば幸親の替へ先上候へば退治せ
仰り候へば御座の中へ入らせのひねり見進らせ夢に忽ち覚り上北面
此示現に驚き去野より又觀心寺へ皈り候へば人々に語りもん
有り候へば事と思ひ寝の夢に見つゝん信じて人も無匹と其後
思ひ合はれ候へば悉く割符と合はれ候へば夢と疑ひ人々も世の形勢
感心し候へば不思議あり事と云ふ 太平記大概

松翁廬跡

陵の畔より

南山巡狩録卷二 後醍醐帝吉野潜幸段注

新井白石君曰

世に吉野拾遺の南朝の事と記し歴々々々徴とて余野山集に於て
適撰人の名と得たり吉房朝臣の所著あり吉房は後醍醐帝に仕へ二心
ありて登遐の後思慕やむば薙髪して僧となり自ら松翁と号し松栢歳
寒して操と愛せざるの義とれり陵の傍に序以後に白僚公連朝臣世に道
古音と号し相も古琴禪師と参りて宗要と究む 以上
大意

竹林院

勝手神社より南子社金剛童子社 當院の什物に文治年中頼朝御教書
官坂町と十段と喜蔵院の次あり 院内往職の内射術の名譽あり吉見和佐
一章 義経追討の書簡あり 射術新流の一卷 米田内門筆あり

椿谷椿山寺

當寺は日藏上人修行の地あり延喜十六年此寺に入て剃髪し修行す
るに六年ありて御嶽上人も入り

叙日藏は洛城の人として六代醍醐天皇延喜十六年正月に金峯山の椿山寺に入り
髪を剃りて通賢法師と稱し十二年才鼓物おび塩と絶て精進修行す事六年
間ありて母の重病に勞れりて聞て始めて山と出づ洛都にわたりて母の疾を見舞て
對面と遂に斯て東寺小居り密教の字問せりも金峯山にありて母を
度へ往來とあせり候へば天慶四年の秋金峯山に入て二十七日と限り断食無言て

秘密供養修せしむに執金剛神のて水とて天童まつて珠味と授け食せむ
尚又蔵王権現あらまのい地獄の苦相と見せり大政威徳天神の宮殿に至る未種く
不思議の事も多し委しん釈書に見しり

布引櫻

吉野紀行云 布引のころころ高根より谷の底まで咲つる花

布引のころころ

吉野の山ありあけよりむすしや

飛鳥井 雅章

天皇橋

天皇櫻

梵天社

猿引坂

是より

摸の観音堂

西國三十三所名所圖會卷之六終

